



音まち千住の縁

WEB SITE



@NakachoHouse



@nakacho_no_ie



千住の文化サロン

「仲町の家」

入場無料

【オープン】

土日祝 10:00 - 17:00

※2022年8月9日(火)～21日(日)は夏季休業

※年末年始も休業あり

【アクセス】

東京都足立区千住仲町 29-1

北千住駅西口・千住大橋駅より徒歩約10分

仲町氷川神社向かい

【お問い合わせ】

「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」事務局

03-6806-1740 (13:00 - 18:00、火・木除く)

info@aaa-senju.com

※ 個人情報は厳重に管理し、本事業の運営およびご案内にのみ使用します。

※ 開室状況やイベント内容は社会状況等に応じて変更になる場合がございます。また、新型コロナウイルス感染防止対策を講じながら運営しています。事前

アートアクセスあだち 音まち千住の縁/通称「音まち」
アートを通じた新たなコミュニケーション(縁)を生み出すことをめざす市民参加型のアートプロジェクトです。足立区千住地域を中心に、市民とアーティストが協働して、「音」をテーマにさまざまなまちなかプログラムを展開しています。

【主催】

東京藝術大学音楽学部・大学院国際芸術創造研究科、特定非営利活動法人音まち計画、足立区

仲町の家

仲町の家

NAKACHO HOUSE

夏号

仲町の家だより
2022.7月発行

NAKACHO PRESS

今号はこの6月4日(土)、5日(日)に初のワンマンライブを仲町の家パイロットプログラムとして開催した「縁側ギタートリオ」のインタビューを掲載。コンシェルジュとして仲町を運営に携わる JOSE 寺田さん、音まちの各企画で活躍中のアーティスト・小日山拓也さん、そしていつもギターを弾きに来てくださる家の常連さんの田中さん。縁側でギターを楽しんできた3者の鼎談をお楽しみください。

この夏の「仲町の家パイロットプログラム」

イヘリム Hyelim LEE

紙の作品展「夜は短し、歩けよ乙女」

「こうして出会ったのも、何かの縁。」

たくさんのご縁の糸は次々とつながる。真夏に開催されるこの展示のテーマは、小説家・森見登美彦さんの展示のタイトルと同名の小説にちなんで名付けた。小説の中では、一夜という、非常に短い時間の間に起きたエピソードがつづく中、その全ての出会いや出来事がどこかでは必ずつながっていると強く語っています。出会いというのは互いに擦れ合う時に起こるハプニング、それはいわば奇跡的行為である。

もちろん、作者と仲町を家の出会いも…

今回は和紙を用いて作品制作を行うアーティスト・イヘリムによるモバイル作品や照明作品を展示。作品が、風に舞ったり、日が暮れるにつれ、そっと色味に変化する様子など、「今」という瞬間の感覚を存分に味わいながら、今でしか出会えない作品と場所での景色、動きや色味、空気と音を皆様にもぜひ感じていただきたいと思ひます。



展示期間：2022年7月16日(土)～8月8日(月)

10:00-17:00 土日・祝日 OPEN

※7月16日(土)、8月6日(土)は20時まで作品ライトアップのため開室時間延長。

会場：仲町の家

入場料：無料

主催・問い合わせ：イヘリム

yarimshin@gmail.com

詳しくはQRコードより



「仲町の家パイロットプログラム」は、さまざまな方々や団体と共に家の活用法や可能性を探っていく「アートアクセスあだち音まち千住の縁 拠点形成事業 パイロットプログラム」の一環で実施しています。

特集

縁側ギタートリオ ライブインタビュー

これまでの3人の仲町の家への関わり方について

寺田 ずっと千住で音楽ができる場所があればいいなって思っていて、小日山さんに誘われ音まちの活動に遊びに来ていて、そのうちに声をかけられコンシェルジュとして仲町の家に勤めるようになりました。

小日山 私も2011年から音まちに参加し始めて、まだ仲町の家が一般公開されてないときからよく出入りしていましたね。それから暫くは忙しくて来れなくなっていたけど、知り合いからギターを引き取り、それを仲町の家を持ってきて、その楽器のメンテナンスのため、またよく来るようになりました。

田中 僕は最初は新聞で千住に古い家があるという記事を見て、家に興味を持って来たんだよね。それで実際に家の中に入って見たらギターが2本置いてあって、ちょっと借りて触ってみた。最初、僕がギターを弾いて、寺田さんが昔の歌をノリよく歌ってくれたんですよ。それでこれはいい感じだなって、また来ようと思って、それからの付き合いだね。ギターが無かったら来ないかもしれないね(笑)

寺田 場所があって、ギターがあつて…音楽が一つの縁をつなぐきっかけになったんですね。

バンドを結成するまでの経緯、その後の活動

寺田 私は衝動的に買ったウクレレを、当時はここでよく弾いていたんですよ。そこに田中さんがギターを弾きに来ていて、じゃあウクレレとギターで合わせてみようってなって、そのあと小日山さんが来たときに3人でやるうってなって、そこで初めてトリオみたいな形になった。

田中 その後、仲町の家でオンラインでの活動に参加した時に小日山さんを知って、自分が演奏している姿も小日山さんがオンラインで見られてた。

小日山 音まちの「千住だけじゃ音楽祭」のオンラインでの活動がきっかけで、お互い初めて意識した感じですかね。

寺田 バンドを結成した後は、音まちの「1DAYパフォーマンス表現街」とか発表の機会が増えた。自分たちだけが楽しむんじゃなく、お客さんを目の前に演奏する。生の音を届けるのがやっぱり一番いいですよ。失敗もするけど、それも含めて全部音楽ということじゃないかと思えます。

小日山 我々3人も縁側での実践でスタイルができてきて、仲町の家についての演奏会により合ったグループを自ら作っていったんだなと思っています。

いつから楽器や音楽を始めましたか

小日山 私は小学5年生の時にゴミ捨て場でギターを拾ったのがきっかけですね。自分で弦を買って張って、それから楽器屋さんに通い詰めるようになり…という風に独学でいろいろやってきました。

田中 僕は中学校くらいかな、まだ家庭にテレビがない時代に、食堂のテレビで洋楽を日本語で歌う音楽番組をやっているのを観て、洋楽に目覚めた。それで15歳くらいの時に、近所の年下の少年が、僕の好きな曲をギターで上手に弾いているのを見て興味を持った。でも実際に楽器を始めたのは20歳くらいかな。

寺田 私はたまたま中学の時に吹奏楽部に入っていて、最初の楽器がクラリネットだった。それで高校に入ってからテナースックスに出会った。でもその時はやっぱりギターが流行っていたから、フォークギターも買ったんですよ。それで大学卒業後に友達を作ったビッグバンドに入って30年間くらいいて、69歳で引退しました。その後は小さなバンドで音楽活動をやりつつ、ウクレレを始め今に至ります。



小日山拓也さん



JOSE 寺田さん



田中さん

初めて仲町の家で縁側ギタートリオとしてライブをした感想

小日山 かなり調子に乗った本気の演奏でした(笑)

寺田 とりあえず音を立てて雰囲気を作っというて…始める前の音遊びみたいな感覚が良かったね。

田中 最初に語りを入れて、楽曲の時代背景を伝えたことでお客さんも乗ってくれて、やっぱり場を和ませるというかね、面白くすることが大事な気がした。

寺田 お客さんとの雰囲気のカヤッチボールをどうやるか。踊っていた子どももいて驚きました(笑)

当日ライブにいらしたお客様に一言メッセージ

寺田 私たちの音楽を聞いていただいてありがとうございます。

小日山 またやります！



「青にうつる、時は溜まる」 開催レポート

去る6月10日(金)、11日(土)、仲町の家パイロットプログラムとして開催した「14.8moon」によるツアーパフォーマンス『青にうつる 時は溜まる』は大好評の内に閉幕しました。ご来場いただいた皆様、誠にありがとうございました。今回の企画は、ダンサーの望月寛斗さんとアートプロデューサーの富山紗瑛さんがとある公演で出会い、意気投合し結成された「14.8moon」の初の公演。舞台となったのは、北千住駅を挟んで東西に位置するふたつの古民家、家劇場と仲町の家。どちらも築100年近く経ち、これまで人が集う場として利用されてきた歴史を持ちます。この二軒の造りや関係性、千住に住まう人や暮らし、その空間が持つ歴史に着想を得たパフォーマンスとなりました。4人のダンサーは、約1ヶ月の滞在を通して、「家になる」というコンセプトをもとに構成や振付を考え、制作に励んで来ました。彼らは壁や柱となり、音楽はその空間や風となり、いまと過去をパフォーマンスによって縫い合わせてくれる、そんな公演となりました。



Photo by : 塚本倫子